

2026年度 授業計画(シラバス)

学 科	理学療法士学科		科 目 区 分	専門分野	授業の方法	演 習
科 目 名	理学療法総合演習Ⅲ		必修/選択の別	必修	授業時数(単位数)	90 (3) 時間(単位)
対 象 学 年	3年		学期及び曜時限	通年	教室名	303
担 当 教 員	荒木 将平	実務経験と その関連資格	理学療法士として回復期病院、介護老人保健施設に勤務経験あり。臨床実習指導者の経験もある。			
《授業科目における学習内容》						
本演習は、理学療法士養成課程3年間の学修の集大成として、卒業後に臨床現場で即応できる総合的な実践能力を確立することを目的とする。これまでに修得した基礎医学(解剖学、生理学、運動学)、臨床医学(運動器、神経、内部障害等)、および理学療法の専門的知識・技術の全てを、多様な臨床場面を想定した課題解決型演習を通じて網羅的に再検証し、有機的に統合する。授業は、学生主体のグループワークやピア・ラーニングを中心に展開し、知識の応用力、論理的思考力、そして多角的な視点からの臨床判断能力を徹底的に涵養する。本演習を通して、理学療法士として生涯にわたり自己研鑽を続けるための強固な基盤を築く。						
《成績評価の方法と基準》						
知識の応用力、論理的思考プロセス、協調性を総合的に評価する。 演習への参加度・貢献度(40%)：毎回の課題解決演習における議論への貢献、論理的な意見表明などを評価する。 演習課題・成果物(60%)：各単元で課される総合的なレポートや、グループでの成果物の質を評価する。						
《使用教材(教科書)及び参考図書》						
配布資料						
《授業外における学習方法》						
医療業界や理学療法分野、地域医療など幅広い視点に加え、基礎的な知識や理学療法の専門知識を整理しておく						
《履修に当たっての留意点》						
基礎的な知識や専門知識を整理し、グループディスカッションでは積極的な意見交換を行う						
授業の方法			内 容		使用教材	授業以外での準備学習 の具体的な内容
第1回	講義形式	授業を通じての到達目標	・本演習が自身の専門性を完成させるための場であることを理解する。 ・現時点での自己の強みと弱みを客観的に把握する。		配布資料	3年間で学んだ全科目の教科書・資料に目を通し、自身の学習ポートフォリオ(学習の記録)を整理しておく。
		各コマにおける授業予定	オリエンテーションと専門性の探求			
第2回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・ICFの枠組みを用いて、対象者の状態を構造的に整理できる。 ・臨床思考の基本となるSOAP形式での記録の重要性を説明できる。		配布資料	指定された模擬症例の情報を読み、ICFの各構成要素に情報を分類しておく。
		各コマにおける授業予定	・演習:ICFに基づき、模擬症例の情報を構造化する ・討議:SOAP形式での思考整理と記録の重要性			
第3回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・研究論文の抄録から、その研究の信頼性と臨床的意義を批判的に吟味できる。 ・EBPの実践プロセスを説明できる。		配布資料	指定された論文の抄録を読み、PICO (Patient, Intervention, Comparison, Outcome)を整理しておく。
		各コマにおける授業予定	・演習:提示された研究論文の概要を読み解き、臨床への応用可能性を討議する。			
第4回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・理学療法士としての法的・倫理的責務を自覚し、適切な行動を判断できる。 ・インフォームド・コンセントの重要性を説明できる。		配布資料	理学療法士及び作業療法士法を読み返し、理学療法士の義務と業務範囲(第2条、第15条など)を確認しておく。
		各コマにおける授業予定	・事例検討:臨床現場で遭遇しうる倫理的ジレンマ(守秘義務、同意取得など)について討議し、理学療法士及び作業療法士法に照らした適切な対応を考察する。			
第5回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・多職種連携における理学療法士の役割と責任を説明できる。 ・SBAR等のフレームワークを用いて、他職種への確な報告ができる。		配布資料	チーム医療における自身の理想の役割について考えをまとめ、SBARの各項目について復習しておく。
		各コマにおける授業予定	・演習:多職種連携を必要とする事例に対し、PTとしての役割と情報伝達(報告・連絡・相談)の方法をロールプレイング形式で実践する。			

授業の方法		内 容		使用教材	授業以外での準備学習の具体的な内容
第6回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・上肢・体幹の主要な関節・筋の機能解剖を、臨床的な動作と関連付けて説明できる。 ・運動連鎖の概念を応用して動作を分析できる。	配布資料	肩関節・肘関節・体幹の主要な筋の起始・停止・作用を総復習する。
		各コマにおける授業予定	・課題解決演習:「肩が挙がらない」原因を、骨・関節・筋・神経の構造と運動連鎖から複数挙げる。		
第7回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・下肢の主要な関節・筋の機能解剖を、歩行周期と関連付けて説明できる。 ・代表的な異常歩行の原因を運動学的に説明できる。	配布資料	正常歩行の各相における主要な関節運動と筋活動を整理しておく。
		各コマにおける授業予定	・課題解決演習:異常歩行(ぶん回し歩行等)の映像を分析し、原因となる解剖・運動学的問題を討議する。		
第8回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・反射、筋緊張、運動学習の生理学的機序を、リハビリテーションの具体例と結びつけて説明できる。	配布資料	錐体路・錐体外路の機能と、上位・下位運動ニューロン障害の違いを復習する。
		各コマにおける授業予定	・課題解決演習:「反射」「筋緊張」「運動学習」の生理学的機序を、リハビリテーションの具体例と結びつけて説明する。		
第9回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・運動様式(有酸素・無酸素)によるエネルギー供給系の違いを説明できる。 ・トレーニングの原理・原則(過負荷、特異性等)を説明できる。	配布資料	有酸素運動とレジスタンス運動が、筋線維(速筋・遅筋)に与える影響の違いを調べておく。
		各コマにおける授業予定	・課題解決演習:有酸素運動とレジスタンス運動が身体に及ぼす生理学的変化の違いをまとめ、目的に応じた運動選択を討議する。		
第10回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・運動負荷に対する循環・呼吸器系の正常な応答を説明できる。 ・酸素運搬のメカニズムを説明できる。	配布資料	ヘモグロビンと酸素解離曲線について復習し、その臨床的意義を考察する。
		各コマにおける授業予定	・課題解決演習:運動負荷に対する心拍数・血圧・換気量の応答機序を説明し、異常応答の要因を推論する。		
第11回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・創傷治癒のプロセスを段階的に説明できる。 ・各段階における理学療法役割(禁忌を含む)を説明できる。	配布資料	炎症の5大徴候がなぜ起こるのかを、血管・細胞レベルの反応から復習する。
		各コマにおける授業予定	・課題解決演習:創傷治癒のプロセスを図示し、各段階における理学療法役割(禁忌を含む)を討議する。		
第12回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・乳児期から老年期までの正常な発達過程と、各ライフステージで好発する機能障害を結びつけて説明できる。	配布資料	原始反射の種類と、その出現・消失時期、臨床的意義を復習しておく。
		各コマにおける授業予定	・課題解決演習:乳児期から老年期までの発達課題と、各ライフステージで好発する機能障害を結びつける。		
第13回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・基礎医学の知識が臨床推論の土台であることを再認識し、応用できる。 ・複数の知識を連結させて事象を説明できる。	配布資料	これまでの基礎分野の演習内容を総復習し、自身の苦手分野を特定しておく。
		各コマにおける授業予定	・演習:複数の基礎科学知識を必要とする応用問題群にグループで取り組み、解説を行う。		
第14回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・代表的な骨折の病態と、術式に応じたリスク管理(荷重制限等)を説明できる。 ・術後合併症(DVT、廃用症候群等)の予防法を立案できる。	配布資料	大腿骨頸部骨折の分類(Garden分類など)と、代表的な術式(人工骨頭置換術、ガンマネイルなど)を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習:大腿骨頸部骨折術後の事例に対し、術式・固定性を考慮したリスク管理とプログラム立案。		
第15回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・変形性関節症の病態と、保存療法・術後療法の適応を説明できる。 ・人工関節置換術後の禁忌肢位とその理由を説明できる。	配布資料	変形性膝関節症、変形性股関節症の画像所見(KL分類など)と臨床症状の関係を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習:変形性膝関節症・股関節症の事例に対し、保存療法と術後療法の適応と内容を討議。		

授業の方法		内 容		使用教材	授業以外での準備学習 の具体的な内容
第16回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・代表的な有椎疾患の病態と、神経学的所見の評価・解釈ができる。 ・日常生活における姿勢指導や動作指導を具体的に立案できる。	配布資料	デルマトームとマイオトームを復習し、主要な神経根の支配領域を覚える。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症の事例に対し、神経症状の評価と日常生活指導を立案。		
第17回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・組織修復過程に基づいた理学療法プログラムを立案できる。 ・再損傷予防のための指導内容を説明できる。	配布資料	前十字靱帯(ACL)損傷の受傷機転と、代表的なスペシャルテスト(前方引き出しテスト等)を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：前十字靱帯損傷、アキレス腱断裂などの事例に対し、組織修復過程に応じたアプローチを討議。		
第18回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・関節リウマチの病態と、関節保護の原則に基づいたADL指導を立案できる。 ・急性期と慢性期におけるアプローチの違いを説明できる。	配布資料	関節リウマチの診断基準と、特徴的な関節変形(スワンネック、ボタン穴など)を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：関節リウマチの事例に対し、関節保護の原則に基づいたADL指導と運動療法を立案。		
第19回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・代表的な上肢・手の疾患の病態と、機能的予後を見据えたアプローチを立案できる。	配布資料	腱板を構成する4つの筋と、その作用を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：腱板断裂、手根管症候群などの事例に対し、機能的予後を見据えたアプローチを討議。		
第20回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・代表的な義肢・装具の目的と適応を説明できる。 ・義肢・装具装着時のチェックポイントと訓練プログラムを立案できる。	配布資料	短下肢装具(AFO)の種類と、それぞれの機能的特徴を復習する。
		各コマにおける授業予定	・課題解決演習：下腿切断、脳卒中片麻痺などの事例に対し、適切な義肢・装具を選定し、訓練プログラムを立案。		
第21回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・運動器疾患の知識を網羅的に再確認し、応用力を高める。 ・複雑な症例に対し、論理的な臨床推論を展開できる。	配布資料	整形外科学および運動器理学療法学の教科書を総復習し、特に重要と思う疾患を3つ挙げておく。
		各コマにおける授業予定	・演習：複数の運動器疾患を合併した複雑な事例に対し、評価からゴール設定までを一貫して討議・発表する。		
第22回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・脳の機能局在と血管支配を理解し、障害部位と臨床症状を結びつけて説明できる。 ・病期に応じた理学療法プログラムを立案できる。	配布資料	主要な大脳動脈(前・中・後)の支配領域と、閉塞による典型的な症状を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：脳卒中(被殻出血、視床出血など)の事例に対し、障害部位と症状を結びつけ、アプローチを立案。		
第23回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・代表的な高次脳機能障害の症状と、その評価法を説明できる。 ・障害特性を考慮した環境設定と運動学習法を立案できる。	配布資料	半側空間無視と半側身体失認の違いを説明できるようにしておく。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：半側空間無視、注意障害などを持つ事例に対し、障害特性を考慮した環境設定と運動学習法を討議。		
第24回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・損傷レベルから残存機能を予測し、ADLゴールを設定できる。 ・合併症(褥瘡、自律神経過反射など)のリスク管理を説明できる。	配布資料	ASIA機能障害尺度の評価項目と、完全・不全麻痺の定義を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：脊髄損傷の事例に対し、損傷レベル(完全・不全)に応じた残存機能の活用とADL獲得を計画。		
第25回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・急性期から社会復帰期に至るまでの、頭部外傷のリハビリテーションの流れを説明できる。	配布資料	Glasgow Coma Scale (GCS) の評価項目と点数の意味を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：急性期から回復期、社会復帰期に至るまでの頭部外傷のリハビリテーションの変遷を討議。		

授業の方法		内 容		使用教材	授業以外での準備学習 の具体的な内容
第26回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・代表的な神経変性疾患の進行性の特徴を理解し、長期的な視点でのアプローチを立案できる。	配布資料	パーキンソン病の4大症状と、Hoehn & Yahr重症度分類を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症などの事例に対し、病気の進行を考慮した長期的アプローチを討議。		
第27回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・代表的な末梢神経障害の病態と、予後予測に基づいたアプローチを立案できる。	配布資料	ギラン・バレー症候群と多発性硬化症の病態（脱髄）の違いと共通点を整理しておく。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：ギラン・バレー症候群、顔面神経麻痺などの事例に対し、病態に応じたアプローチを討議。		
第28回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・脳性麻痺の病型分類と、発達段階に応じたアプローチを説明できる。 ・粗大運動能力分類尺度（GMFCS）の概要を理解する。	配布資料	脳性麻痺の痙直型・アテトーゼ型・失調型の特徴的な姿勢・運動パターンを復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：脳性麻痺の事例に対し、発達段階に応じたアプローチと装具療法、家族支援を計画。		
第29回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・神経系疾患の知識を網羅的に再確認し、応用力を高める。 ・高次脳機能障害を合併した症例への対応を具体的に立案できる。	配布資料	神経系理学療法学の教科書を総復習し、特に重要と思う疾患を3つ挙げておく。
		各コマにおける授業予定	・演習：高次脳機能障害を合併した神経疾患事例に対し、評価からゴール設定までを一貫して討議・発表する。		
第30回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・メディカル情報を解釈し、安全な運動処方（強度、時間、頻度）を立案できる。 ・心大血管疾患リハビリテーションにおける運動中止基準を遵守できる。	配布資料	心電図の基本波形と、危険な不整脈（心室細動など）の波形を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：心筋梗塞後、心不全の事例に対し、メディカル情報を解釈し安全な運動処方を立案。		
第31回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・呼吸機能評価や血液ガス分析結果を解釈し、適切な呼吸理学療法を選択できる。 ・排痰法や呼吸筋トレーニングを具体的に指導できる。	配布資料	閉塞性・拘束性換気障害の肺機能検査における特徴的なパターンの違いを復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：COPD、術後肺炎の事例に対し、呼吸理学療法の適応を判断し、具体的なプログラムを立案。		
第32回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・合併症を考慮した運動療法プログラムを立案できる。 ・低血糖・高血糖時の症状と対処法を説明できる。	配布資料	糖尿病の運動療法における禁忌と、インスリン注射部位への注意点を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：合併症を持つ糖尿病事例に対し、血糖管理やフットケアを含む包括的アプローチを計画。		
第33回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・透析患者の身体的特徴を理解し、安全な運動療法を立案できる。 ・シャント側の腕に対する日常生活上の注意点を指導できる。	配布資料	血液透析と腹膜透析の原理と、それぞれの利点・欠点を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：血液透析導入期の事例に対し、シャント管理や透析中の血圧変動を考慮した運動療法を立案。		
第34回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・がんの病期（早期期、中期、後期など）に応じた理学療法の役割を説明できる。 ・がん治療の副作用（倦怠感、リンパ浮腫など）に対するアプローチを立案できる。	配布資料	がんのリハビリテーションにおける「予防的」「回復的」「維持的」「緩和的」アプローチの違いを整理しておく。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：乳がん術後、肺がん手術期の事例に対し、QOL向上を目的としたアプローチを討議。		
第35回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・フレイル・サルコペニアの評価法を理解し、多因子へのアプローチを立案できる。 ・高齢者の転倒予防プログラムを具体的に計画できる。	配布資料	フレイルの診断基準（日本版CHS基準など）と、サルコペニアの診断基準を復習する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習：転倒を繰り返す虚弱高齢者の事例に対し、多因子へのアプローチと転倒予防プログラムを立案。		

授業の方法		内 容		使用教材	授業以外での準備学習の具体的な内容
第36回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・終末期における理学療法士の役割と、安楽を目的としたアプローチ(ポジショニング、呼吸介助など)を説明できる。	配布資料	緩和ケアにおけるチームアプローチの重要性と、理学療法士に求められるコミュニケーションスキルを考察する。
		各コマにおける授業予定	・臨床推論演習:疼痛や呼吸困難を呈する終末期がん患者に対し、安楽を目的とした理学療法の役割を討議。		
第37回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・内部障害の知識を網羅的に再確認し、応用力を高める。 ・複数の疾患を持つ高齢者に対し、生活全体を支える視点でアプローチできる。	配布資料	内部障害理学療法学、地域理学療法学の教科書を総復習し、特に重要と思うテーマを3つ挙げておく。
		各コマにおける授業予定	・演習:複数の内部障害を持つ高齢者の事例に対し、生活全体を支える視点でのアプローチを討議・発表する。		
第38回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・複数の領域にまたがる複雑な課題に対し、優先順位をつけて論理的に問題を解決する能力を養う。	配布資料	これまでの演習内容を総動員し、自身の思考の癖を意識しながらグループ討議に臨む。
		各コマにおける授業予定	・演習:運動器、神経、内部障害を合併した超複雑事例に対し、グループで最適な理学療法を討議し、その論理を構築する。		
第39回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・未知の課題や情報が不十分な状況でも、既存の知識を応用して最適解を導き出そうと試みることができる。	配布資料	前回の演習での反省点を踏まえ、自身の思考プロセスを改善する方策を考えておく。
		各コマにおける授業予定	・演習:前回に続き、異なるタイプの超複雑事例に対し、問題解決能力の限界に挑戦する。		
第40回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・曖昧な知識を明確な言葉で表現し、他者に伝達する能力を高める。 ・自身の理解の穴に気づき、修正できる。	配布資料	担当するテーマについて、誰にでも分かるような説明資料(図や表を含む)を準備する。
		各コマにおける授業予定	・演習:各グループが難解テーマ(例:心電図異常、高次脳機能障害)の解説者となり、他グループに教授する。		
第41回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・教えることを通して、知識の定着と体系化を図る。 ・他者からの質問に的確に答えることで、多角的な視点を獲得する。	配布資料	前回のピア・ティーチングでの反省点を活かし、より質の高い説明資料と発表を準備する。
		各コマにおける授業予定	・演習:前回と異なるテーマで、教えることを通して知識の定着と体系化を図る。		
第42回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・時間的制約の中で、迅速かつ的確な判断を下す訓練を行う。 ・知識の想起スピードと正確性を高める。	配布資料	これまでの全範囲を網羅的に復習し、即座に知識を引き出せるように準備しておく。
		各コマにおける授業予定	・演習:時間を区切り、多領域にわたる課題群に対し、迅速かつ的確な判断を下す訓練を行う。(実践能力シミュレーション)		
第43回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・より臨症的な思考を要する課題群に集中して取り組み、応用力を最終確認する。 ・自身の知識・思考の定着度を客観的に評価する。	配布資料	前回のシミュレーションで間違えた問題や、判断に迷った問題を徹底的に復習する。
		各コマにおける授業予定	・演習:より臨症的な思考を要する課題群に集中して取り組み、応用力を最終確認する。(実践能力シミュレーション)		
第44回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・3年間の学びが、臨床実践能力として統合されたことを自己確認できる。 ・自身の成長を論理的に発表できる。	配布資料	3年間の学習を振り返り、最も学びが大きかった症例や経験について、その理由とともにまとめておく。
		各コマにおける授業予定	・演習:グループごとに3年間の学びを象徴する症例の一つを選び、その理学療法プロセスを完璧な形で発表する。		
第45回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	・理学療法士としてのプロフェッショナル・アイデンティティを確立する。 ・生涯にわたり学び続ける専門家としての自覚を持つ。	配布資料	臨床実習や卒業後のキャリアプランについて考え、専門家としての第一歩を踏み出す決意を固めておく。
		各コマにおける授業予定	・演習全体の振り返り ・個人ワーク:理学療法士としてのプロフェッショナル・アイデンティティと、今後の自己研鑽計画を明文化し、発表する。		